

宇治の建造物

宇治市教育委員会

宇治の建造物

宇治市教育委員会

はじめに

文化財の保護思想の普及を図るため、宇治市指定文化財を紹介した冊子「宇治の文化財」を昭和五十六年三月に、昭和五十九年三月には、市内に所在する主要な遺跡の解説書として「宇治の遺跡」を、昭和六十年三月には国指定の美術工芸品を紹介した「宇治の美術工芸」を刊行しました。これらの冊子は多くの方々に活用を頂いているところであります。

このたび、「宇治の文化財」の第四集として、市内に所在する国宝・重要文化財に指定されている十二件三十一棟の建造物を紹介するため「宇治の建造物」を発刊することとなりました。

文化財の保護活用を図るために制定されたのが文化財保護法で、その主旨は「文化財を保存し、且つその活用を図り、もって国民の文化的向上に資するとともに、世界文化の進歩に貢献すること」であります。国においては、文化財保護法に基づき、有形文化財のうち重要なものを重要文化財に、重要文化財のうち世界文化の見地から価値の高いもので、たぐいなき国民の宝たるべきものを国宝に指定しています。本市に所在する建造物のなかでは国宝として三件六棟、重要文化財として九件二十五棟が指定されています。これら十二件三十一棟

の国指定文化財は、京都府下全体の四・三%、京都市を除くと十五%を占めています。

これらの文化財は、極めて価値の高いものばかりで、長い歴史と風土のなかで先人の努力によって護り伝えられてきました。本書に紹介しました国指定文化財は、宇治の千年の歴史を明らかにするうえからも大切なものがあります。このような意味におきまして、本書が宇治の文化遺産に対する理解を深め、保護を図るうえに役立つことを願うものであります。

なお、本書の編集につきましてご指導・ご協力をいただいた京都府教育庁指導部文化財保護課技師加藤勉、奥野裕樹の両氏に厚くお礼を申しあげます。また、格別のご協力を賜りました文化財所有者・管理者等関係各位に敬意を表すとともに、お礼を申し上げます。

昭和六十一年三月

宇治市教育委員会

教育長 岩本 昭造

例 言

一、本書は、国指定の国宝・重要文化財に指定されている建造物の解説書である。

一、建物の名称・所在地・規模形式の表記は、文部省告示に従った。

一、本書に使用した用語のうち、※印の用語については末尾に解説をしている。

一、本書の編集は、宇治市教育委員会社会教育課が行い、左記の協力を得た。

京都府教育庁指導部文化財保護課

技師、加藤 勉・奥野 裕樹

目 次

平等院鳳凰堂	8
平等院觀音堂	10
宇治上神社本殿	11
宇治上神社拝殿	12
宇治上神社境内社春日社社殿	13
白山神社拝殿	14
浮島十三重塔	15
宇治神社本殿	16
十八神社本殿	17
許波多神社本殿 (木幡神社又柳神社社殿)	18
浄土院養林庵書院	19
萬福寺大雄宝殿	20
萬福寺法堂	22
萬福寺天王殿	23
平等院	8
平等院	10
宇治上神社	11
宇治上神社	12
宇治上神社	13
白山神社	14
放生院	15
宇治神社	16
十八神社	17
許波多神社	18
浄土院	19
萬福寺	20
萬福寺	22
萬福寺	23

萬福寺齋堂	萬福寺	24
萬福寺禪堂	萬福寺	25
萬福寺伽藍堂	萬福寺	26
萬福寺祖師堂	萬福寺	26
萬福寺鐘樓	萬福寺	27
萬福寺鼓樓	萬福寺	27
萬福寺三門	萬福寺	28
萬福寺繪門	萬福寺	29
萬福寺東方丈	萬福寺	30
萬福寺西方丈	萬福寺	30
萬福寺通玄門	萬福寺	31
萬福寺開山堂	萬福寺	32
萬福寺壽藏	萬福寺	33
萬福寺舍利殿	萬福寺	34
図解	35
用語解説	37
国指定建造物一覧	40

宇治の建造物（概要）

古来より水陸交通の要衝の地として、歴史にその名をとどめている宇治の地には、各時代を代表する数多くの文化遺産が遺されている。現在、国指定文化財四十六件（内、国宝九件）、府指定文化財四件、市指定文化財二十三件を数える。

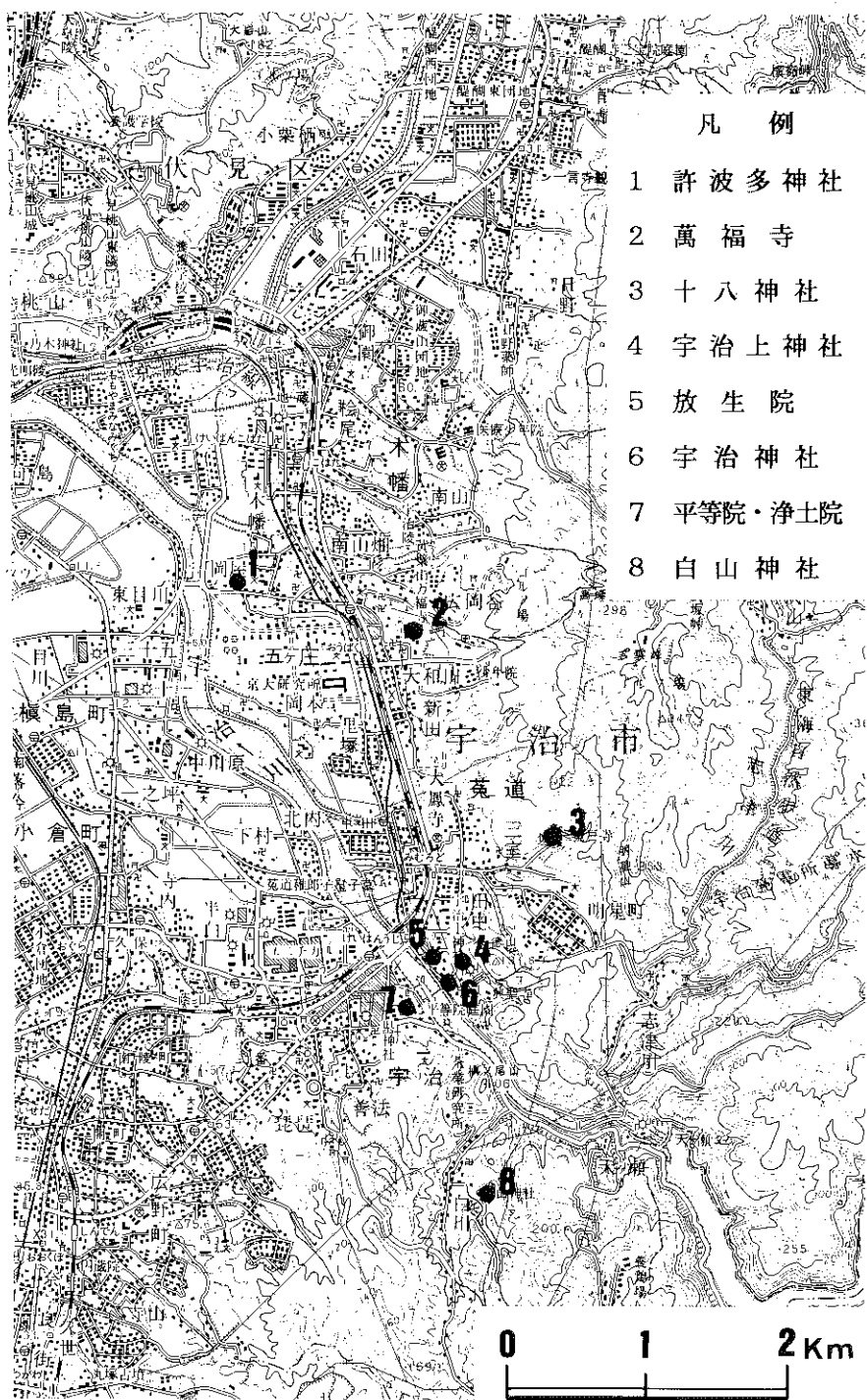
建造物で国宝及び重要文化財に指定されたものは、十二件三十一棟（内、国宝三件六棟）である。京都府全体で国指定文化財に指定されているものは、昭和六十一年一月二十二日現在で二百七十三件五百五棟（内、国宝四十六件五十八棟）であり、この中で宇治市が占める比率は総数で四・三％（国宝で六・五％）であるが、京都市を除けばその比率は著しく増加し、総数で十五％（国宝で三十七％）となり、京都市を除いた府内の市町村の中では最も多くの国指定文化財が所在している。

この十二件三十一棟のうち特に優れたものとして、平等院鳳凰堂・宇治上神社本殿・宇治上神社拝殿が国宝に指定されている。

平等院鳳凰堂は、美術工芸品として国宝に指定されている中堂壁扉画・二重天蓋・阿弥陀如来坐像・雲中供養菩薩や史跡名勝に指定されている庭園とともに、平安貴族が追いつめた極楽浄土を具現しようとしたもので、平安文化を今に伝えている極めて貴重で優れた建築である。宇治上神社本殿は、日本最古の神社建築としてその姿をよく遺しており、又、幕股の変遷過程を知るうえにも貴重な建物である。宇治離宮の伝承を持つ拝殿は、藪を多用し壁を大きく白壁として建物を低く構えているところは、寝殿造りの邸宅建築を想起させるもので、拝殿建築として優れており特色のある建物である。

又、我国において類例の少ない中国明末の様式を用いて建てられた萬福寺は、十七棟の建物が国の重要文化財に指定されている。中心線上に三門・仏殿（大雄宝殿）・法堂を建てていることは、他の禅宗寺院と同じであるが、天王殿を三門と仏殿の間に、又他の諸堂をその左右に厳正に対称配置し、僧堂を禅堂と齋堂に分け、廻廊を天王殿から出して三門を独立させる。というような特徴があり、境内は一趣独特の雰囲気漂っている。

これらの他に、藤原頼通の娘寛子が建立した金色院の鎮守である白山神社拝殿、宇治橋再建の供養塔として建立された浮島十三重塔、鎌倉時代の特徴をよく遺している宇治神社本殿・宇治上神社境内社春日社社殿・平等院観音堂、室町時代の十八神社本殿・箱棟の鬼板に柳文を浮き彫している許波多神社本殿、桃山時代の浄土院養林庵書院が国の指定を受けている。



凡 例

- 1 許波多神社
- 2 萬福寺
- 3 十八神社
- 4 宇治上神社
- 5 放生院
- 6 宇治神社
- 7 平等院・浄土院
- 8 白山神社

社 寺 の 位 置 図

一、平等院鳳凰堂

四棟

所在地 宇治蓮華 平等院

時代 平安時代（天喜元年（一〇五三））

指定 明治三十年十二月二十八日

国宝指定 昭和二十六年六月九日

中堂（一棟） 桁行三間、梁間二間、一重もこし付、

入母屋造、本瓦葺

附、旧板扉 八枚

上品中生、上品下生、中品上生、下品

上生各二枚

旧鳳凰棟飾一對

両翼廊（二棟）各桁行折曲り延長八間、梁間一間、

隅楼二重三階、宝形造、廊一重二階、

切妻造、本瓦葺

尾廊（一棟）桁行七間、梁間一間、一重、切妻造、

本瓦葺

藤原頼通が父道長からゆづりうけた別荘を寺とし、阿弥陀堂を建てたのが鳳凰堂で、中堂・両翼廊・尾廊よりなる左右対称の建物であるが、両翼廊の折れまがり部分に宝形造の楼閣を構え中堂とのつりあいをとっており、変化のある優美な構成である。

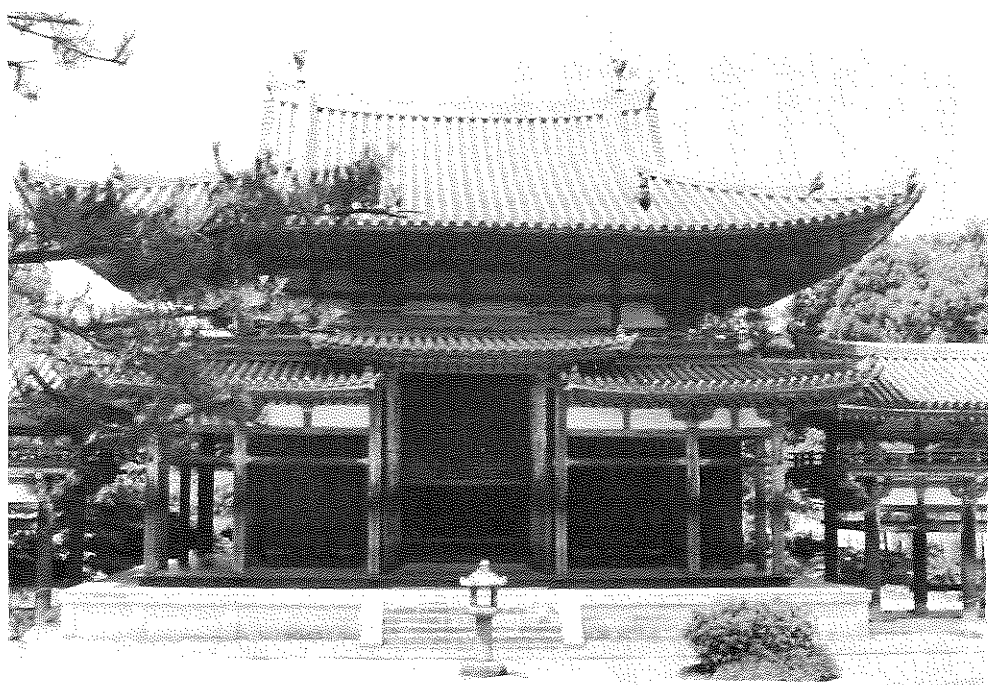
中堂の柱は円柱で、頭貫・長押を用い軒は二夕軒繁檼で地榼は円、飛檐檼は角である。柱上の組物は、三手先で支輪・尾榼を附している。正面の三間と両側面の前二間を板唐戸とし、側面後端は漆喰壁である。本瓦葺の屋根で大面取の方柱を用い、柱間を開放とした裳階を三方に廻している。内部は折上小組格天井で、二重天蓋を吊り床は板敷とし、螺鈿・漆・絵画・金箔などを使って室内を装飾している。

翼廊は二夕軒で斗拱は平三ツ斗組、円柱を用い柱間を開放とし、上部に床を張り折曲り隅に勾欄を附した高樓を設けている。

このように、変化に富んだ優美な外観と絢爛たる内部装飾を用いることによって、極楽浄土を具現しようとした意図が窺えるとともに、当時の芸術の集大成として平安時代を代表する名建築である。



全 景



鳳 凰 堂



二、平等院観音堂

一棟

所在地 宇治蓮華 平等院

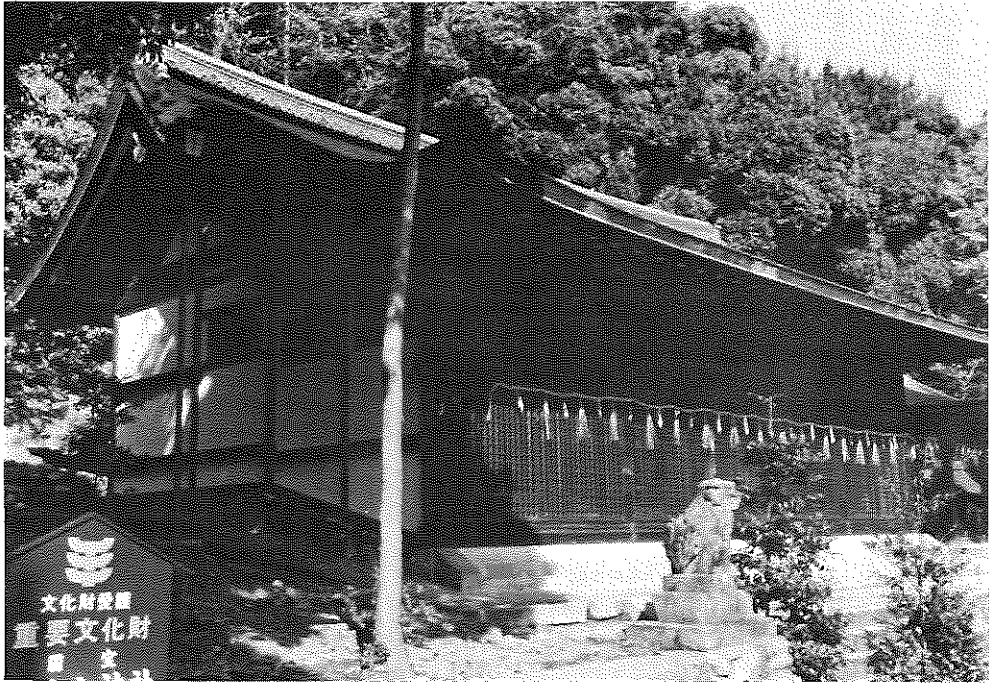
時代 鎌倉時代前期

規模 桁行七間、梁間四間、一重、寄棟造、
本瓦葺

指定 明治三十五年四月十七日

観音堂は藤原頼通が平等院を建立するときに、別荘の建物を転用したものであると言われているが、現在の建物は鎌倉時代のものである。

寄棟造りの通例どおり平側より妻側の勾配の急な屋根で、軒は二重繁檼、斗拱は大斗肘木組を用いている。建物正面の中央三間を板扉、両端を漆喰壁とし、側面は前一間を板扉、中央二間を連子窓、残りを漆喰壁としている。背面は中央部に板扉を取り付け、その他は漆喰壁としていいる。柱は円柱を用い内法及び地長押を取り付け、内部庇は化粧屋根裏天井、身舎は組入格天井で床は拭板張りである。



三、宇治上神社本殿

一棟

所在地 宇治山田 宇治上神社

規模 桁行五間、梁間三間、一重、流造、
檜皮葺、内殿三社、各一間社流造

時代 平安時代後期

指定 明治三十五年四月十七日

国宝指定 昭和二十七年三月二十九日

宇治上神社は、明治初期まで下手にある宇治神社とあわせて宇治離宮明神と称し、神社建築として日本最古の遺構である。

本殿は内殿三社からなり、背面と左右内殿の側面を本殿と共用しているが、各内殿とも同一の大きさでなく、葺の形にも相違が見られることから、本来は各々独立していたものを後に覆屋をかけたものであることが窺える。これによって、保存状態は良好で勾欄や剝抜臺股をはじめ、組物などの細部にわたって平安時代後期の特徴をよく今に伝えている。

四、宇治上神社拝殿

一棟

所在地

宇治山田

宇治上神社

規格式

桁行六間、梁間三間、一重、切妻造
両妻一間通り庇付、向拝一間、
檜皮葺

附、
棧唐戸まきからど 四枚

臺股 一個

時代

鎌倉時代前期（伝宇治離宮）

指定

明治三十五年七月三十一日

国宝指定

昭和二十七年十一月二十一日

この拝殿については、宇治離宮の建物を移したものであると古くから言われているが定かではない。

建物は切妻造りで、両妻に各一間の庇を付け軒は隅木がなく、※縫破風にて納め、正面と側面は別に葺いている。これによって、複雑な曲線と勾配が組み合わさって寝殿造風の邸宅を彷彿させる優美な外観である。

内部は格天井、拭板張で建物四圍に縁・勾欄を付けて

いる。正面・背面の板扉は明治期に付替られたもので、本来は棧唐戸まきからどが用いられており、附指定の四枚がそれである。

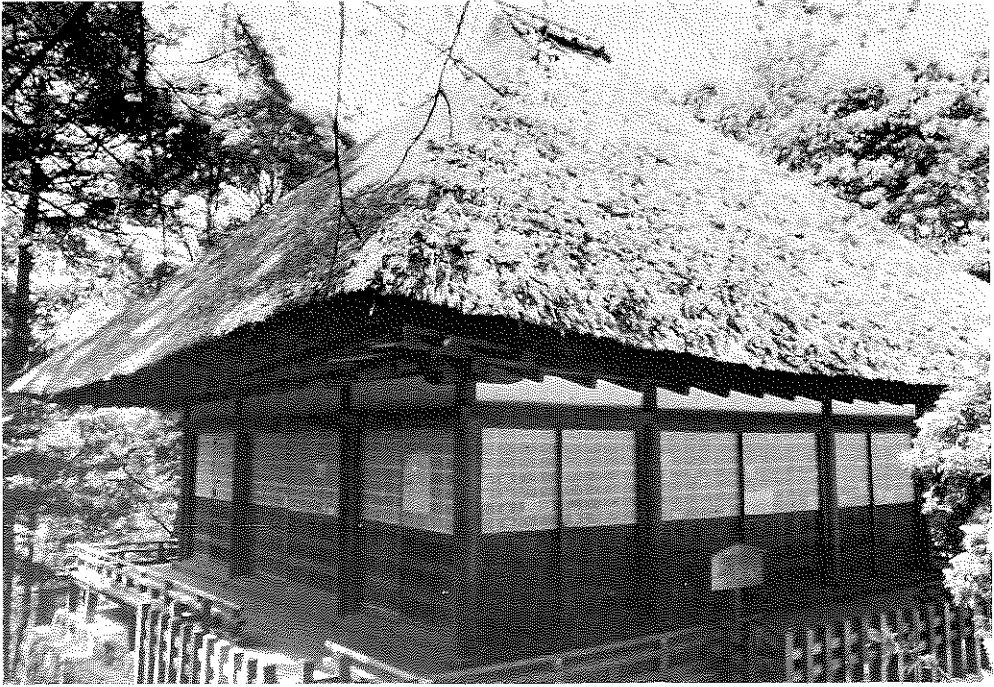




五、宇治上神社境内社春日社社殿 一棟

所在地 宇治山田 宇治上神社
 規模 一間社流造、檜皮葺
 時代 鎌倉時代
 指定 明治四十五年二月八日

本殿に向かって右に所在する柱間一間の小さな流造^{*}の建物で、二夕軒の繁樺・舟肘木・円柱を用い斗拱は三ツ斗組、三方に縁を廻し勾欄・脇障子^{わきしょうじ}を設けている。向拝^{*}は面取^{めんとり}の大きな角柱で、擬宝珠^{ぎぼし}勾欄を附した木製階段を附設している。



六、白山神社拝殿

一棟

所在地

白川娑婆山

白山神社

規模

桁行三間、梁間三間、一重、寄棟造
茅葺

時代

鎌倉時代（建治三年（一二七七））

指定

明治四十三年八月二十九日

白山神社は、藤原頼通の娘寛子が建立した金色院の鎮守社として建てられたもので、祭神は伊邪那美命である。当社の拝殿は、建治三年（一二七七）の建立で宇治離宮の遺構と伝聞されている。外観は、棟の短かい寄棟造で四隅にのみ舟肘木の組物を用い、簡素な形状である。内部は、折上小組格天井、板床で四囲の建具は、後世の補作である。なお、当社の伊邪那美尊像・十一面観音像は、ともに重要文化財に指定（明治四十二年四月五日指定）されている。

七、浮島十三重塔

一基

所在地

宇治東内
放生院
(宇治蓮華地先)

法量

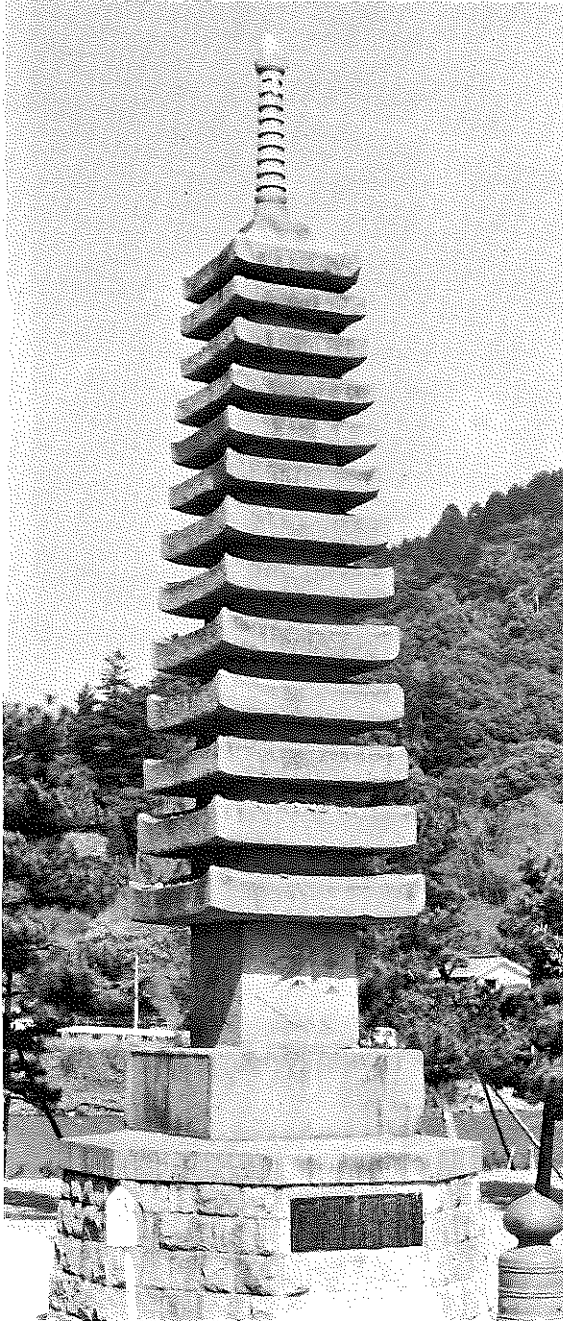
総高十五・二〇メートル(五〇尺)、
(基礎、巾二・六メートル、高さ一
メートル)

時代

鎌倉時代

指定

昭和二十八年三月三十一日



この塔は宇治橋再建の供養塔として、弘安九年(一二八六)に叡尊が建立した石造の十三重塔で、基礎石の背面に造立に関する銘文と網代禁止の官符が陰刻され、軸部に金剛界四仏の種子しじが刻されている。

以後、いく度かの修理がなされたが、宝暦六年(一七五六)の大洪水により倒壊、宇治橋とともに流失し、永らく土中に没していたものを、明治四十一年に福田海が発掘再興し、九重目の屋根と相輪を新しく補い現在の位置に建てられたものでわが国古石塔中第一位の高さを誇る。



八、宇治神社 本殿

一棟

所在地 宇治山田 宇治神社

規模形式 三間社流造、檜皮葺

時代 鎌倉時代

指定 明治三十五年七月三十一日

木造つぎ菟う道みち稚ち郎らう子こ命いのち坐ま像ざう（重文）を祀る本殿は、三間社流造で軒は二重繁ふさ檼せき、斗と栱こうは三ツ斗組で斗栱間にはもも蓐もも股またを入れていり。身舎と向むか拝ひはこ虹こう梁りやうでな繋なぎ、正面に擬宝珠柱付登勾欄を附した木製階段を設け、身舎の三方に勾欄を廻している。内部は内陣うちじんと外陣そとじんに分かれており、内陣正面の柱間には板扉を備えているが、外陣の柱間は開放としている。天井はともに小組格天井で床は拭ぬぐ板い張はりとし、外廻りは丹塗にとし蓐もも股またにも彩色が施あげられている。身舎の蓐もも股または、鎌倉時代の特徴である左右が対称であるが、向拝の蓐もも股または左右対称が若干づれており後補のものと思われる。

九、十八神社 本殿

一棟

所在地

菟道奥ノ池

十八神社

規模形式

三間社流造、こけら葺

時代

室町時代（長享元年（一四八七）十月

十六日の墨書有）

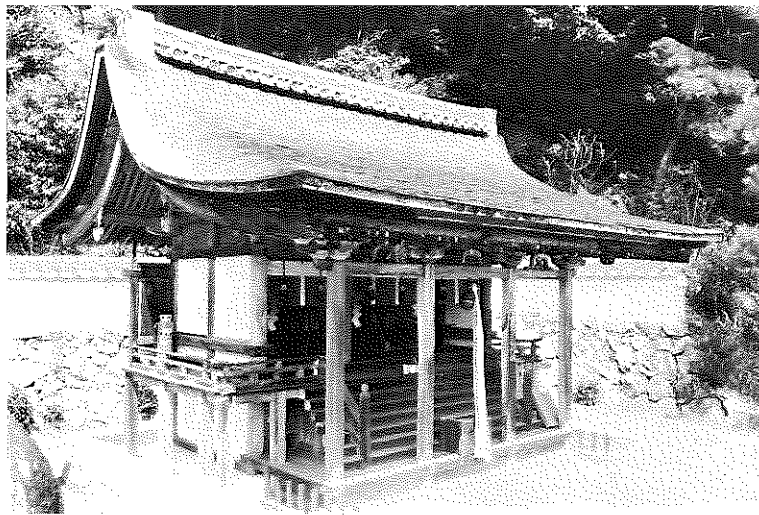
指定

大正十二年三月二十八日

本神社は、もとは三室戸寺の鎮守として建てられたものであるが、明治維新の時に分離して独立の神社となり現在に至っている。

本殿は三間社流造で、身舎は丸柱を用いその上に舟肘木を載せている。向拝は面取りした角柱で、斗拱は和様の三ツ斗組で斗拱間には蓐股を入れ、身舎と向拝は両端の柱を虹梁で繋ぎ、中の二本の柱は手挟みで飾り、軒は両方とも二重檼である。

身舎の内部は内陣・外陣に分かれ、内陣正面の柱間は板扉構で、外陣は開放とし、天井は内陣が棹縁天井、外陣が鏡天井である。



外部は三方に勾欄付の縁を廻し、両脇に脇障子を附し正面に擬宝珠柱付登勾欄を附した木製階段を備えている。

蓐股墨書銘文

「長享元年

十月十六日」

三室戸寺所蔵

棟札銘文

「明応三年

九月八日 十八神

新羅大明神遷座」

十、許波多神社本殿
 (木幡神社又柳神社社殿)

一棟

所在地 五ヶ庄古川 許波多神社

規模 三間社流造、檜皮葺

時代 室町時代(内陣厨子に永祿五年へ一五六二の墨書名有)

指定 明治三十九年四月十四日

許波多神社は延喜式内社許波多三座の一座にあてられ、柳明神と称して柳山(五箇庄三番割黄檗公園内)に所在していたが、明治八年(一八七五)陸軍省の用地となつて、御旅所であつた現在地に移つたものである。

本殿は三間社流造で、棟は箱棟で鬼板・千木・堅緒木を付け、斗拱は三ツ斗組で斗拱間に裏股を入れている。身舎の正面三間は板唐戸とし、三方に縁を廻し脇障子・勾欄を付け、向拝に浜床を設けて正面に擬宝珠柱付の登勾欄を附設している。天井は棹縁天井、床は拭板張として妻飾りは又首組である。繊細な木割や裏股の彫刻に、室町時代後期の特徴をよく表わしている。なお、箱棟の

鬼板は柳を図案化した特殊なものである。

内陣厨子銘文

「永祿五年九月二十六日造立

五箇庄楊大明神」





十二、浄土院養林庵書院

一棟

所在地 宇治蓮華 浄土院

規模 桁行九・一メートル、梁間九・九メートル、一重、入母屋造、檜皮葺

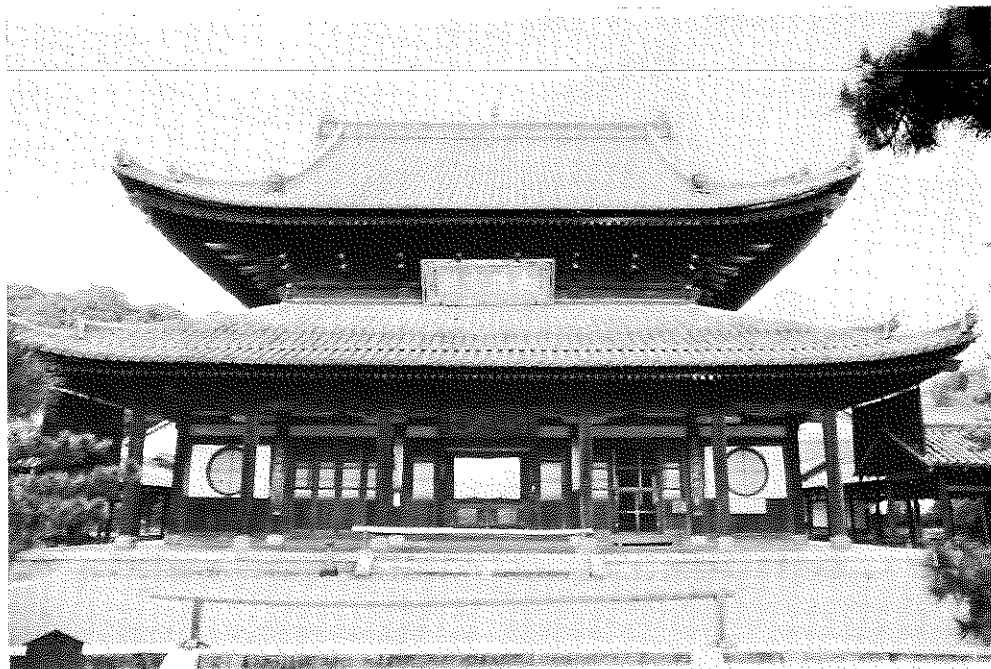
時代 桃山時代

指定 昭和二年四月二十五日

書院は伏見城から移したものと伝えられているが、定かではない。しかしながら各所に桃山時代の特徴を現わしている。

建物は桁行四間、梁間三間、一重入母屋造で、軒は一重疎樞で柱は角柱を用い長押付である。平面は前一間通り化粧屋根裏で、拭板張りの広縁に式台を附設している。

内部は九室に分かれ、中央中ノ間に仏壇を安置し、天井は棹縁天井、床は畳敷として室は襖で仕切り、上の欄間には藤の雄大な透彫を入れているので有名である。表六畳は上段構で、違棚・書院を設け妻飾りは木連格子・梅鉢懸魚を飾り、各部所に飾金具を打っている。



三、萬福寺大雄宝殿

一棟

所在地

五ヶ庄三番割

萬福寺

規模形式

桁行三間、梁間三間、一重もこし付、
入母屋造、本瓦葺

時代

江戸時代、寛文八年（一六六八）の

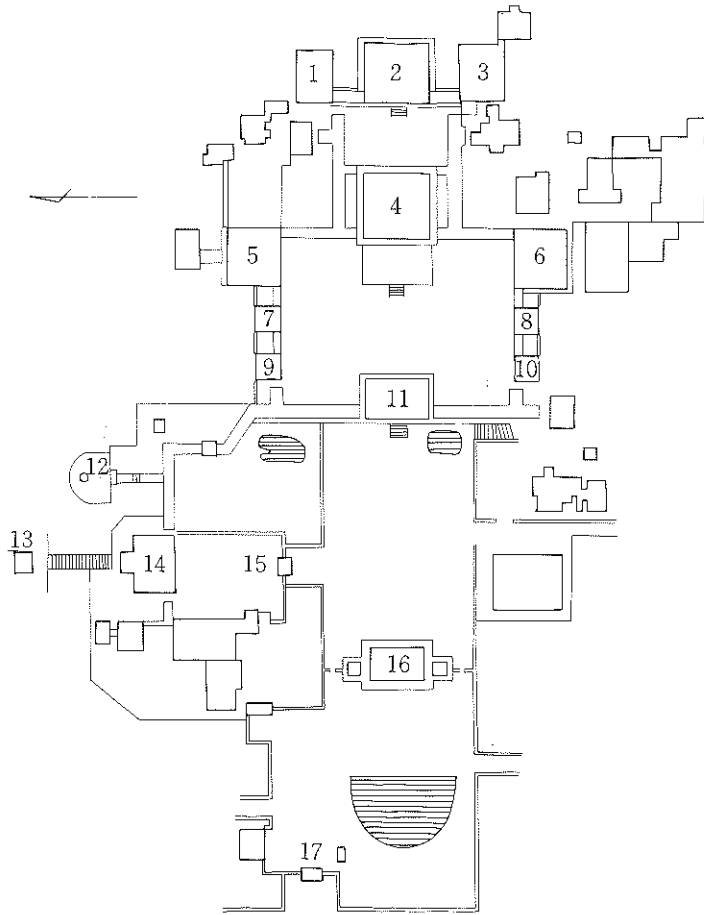
梁銘有

指定

大正二年四月十四日

萬福寺は中国僧隱元隆琦が開いた黄檗宗の総本山で、大棟中央の宝珠や数多く掲げられている額・聯などに見られるように、中国明末の建築様式を基本にしており、又、用材にチーク材を用いるなど他の寺院と趣を異にしている。諸堂宇の建立は、寛文元年（一六六一）の西方丈に始まり以降、次々に建立し宝永年間に至ってようやく伽藍が完成したものである。

大雄宝殿は一般寺院で言うところの本堂で、大棟中央の火焰付宝珠・裳階両端の円窓が特徴的である。上層軒は、二重扇檼で斗拱は三手先詰組尾檼付とし、裳階は



配置図

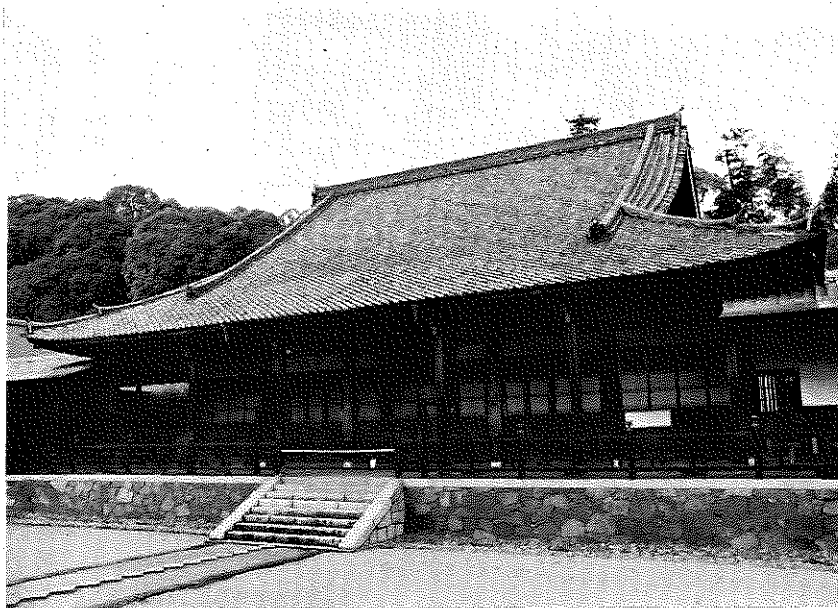
- | | | |
|--------|--------|--------|
| 1 西方丈 | 7 祖師堂 | 13 舍利殿 |
| 2 法堂 | 8 伽藍堂 | 14 開山堂 |
| 3 東方丈 | 9 鼓樓 | 15 通玄門 |
| 4 大雄宝殿 | 10 鐘樓 | 16 三門 |
| 5 禪堂 | 11 天王殿 | 17 総門 |
| 6 齋堂 | 12 壽藏 | |

二重檼種、斗拱は三ツ斗組で斗拱間に板斗拱を入れ、柱は全て角柱で石造の礎盤付である。前面一間通りを開放とし、天井は輪檼の化粧屋根裏（蛇腹天井）で、床は四半瓦敷とし側面の建具は扉障子を用い、正面両端に凹窓

を設け内部の天井は鏡天井で床は四半瓦敷で、内陣の後方に來迎柱を建てて石製の須弥壇を設置し、左右側に十羅漢を配置している。

三、萬福寺 法堂

一棟



所在地

五ヶ庄三番割

萬福寺

規模形式

桁行五間、梁間六間、一重、入母屋造、棧瓦葺

時代

江戸時代、寛文二年（一六六二）の

額銘有

指定

大正二年四月十四日

法堂は住待が説法を行う処で重層建築が多く見られるが、萬福寺の法堂は単層入母屋造棧瓦葺（当初は柿葺であったが、明治十四年に改葺）である。軒が浅く一重疎樑で鼻隠板を打ち、板斗拱を用い比較的細い材木を使用し、柱は方柱で化粧貫・地覆石・礎盤を附している。

前面一間通りを開放とし、前庇正面は虹梁を架け板斗拱で軒桁を支え、化粧屋根裏天井で輪樑・二重虹梁・大瓶束などを組み合わせた特異な構造を成し、正面両端の窓の障子は内開で釣られており、これも特徴の一つである。側面は、前四間が漆喰壁で次の一間を出入口としている。

内部は四半瓦敷の床、鏡天井とし柱間に虹梁を架け、後方に来迎壁を構え法座を設けた須弥壇を置いている。

十、萬福寺 天王殿

一棟



所在地

五ヶ庄三番割

萬福寺

規模形式

桁行五間、梁間三間、一重入母屋造

本瓦葺

時代

江戸時代（寛文八年）

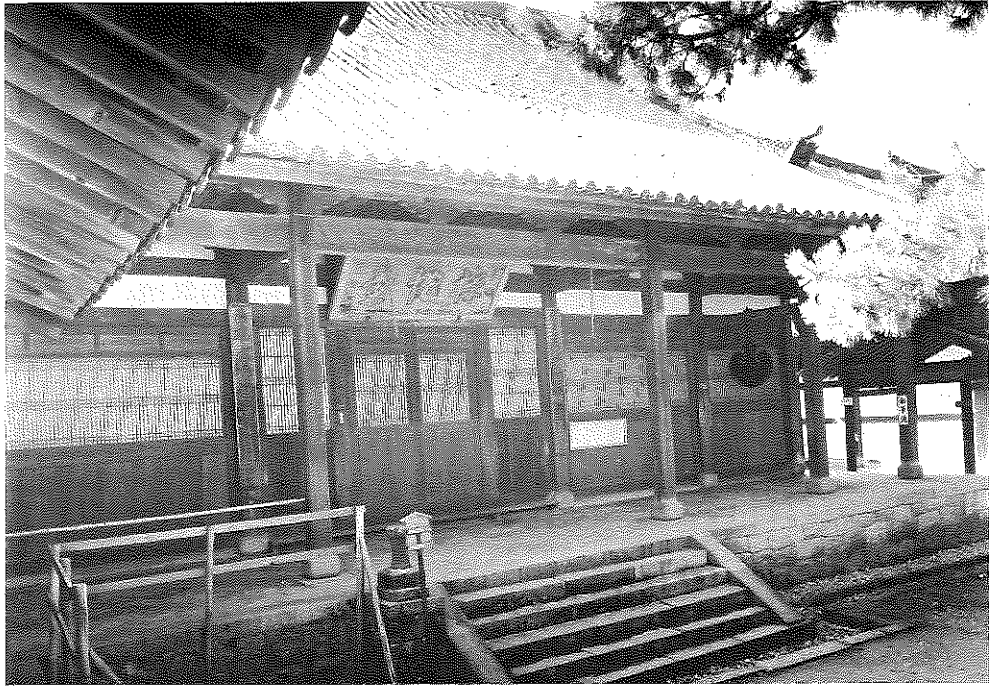
指定

大正二年四月十四日

正面五間（十九・八メートル）側面三間（十一・八メートル）、一重入母屋造本瓦葺の建物で、中央に布袋像背中合わせに韋駄天像、両脇に四天王を安置し、軒は二重の疎椽で斗拱は三ツ斗組。柱はチーク材の方柱で脚下に石造礎盤を附し、正面一間通りを吹放しとし天井は鏡天井で床は四半瓦敷である。

正面背面とも中央一間は扉障子と半扉を付け、両脇の一間は網戸下金剛柵、両端の一間は漆喰壁としている。内部は鏡天井で斗拱は挿肘木、虹梁を架け斗拱間に藁股を入れ、中央に須弥壇を設けている。

禅宗伽藍では三門から廻廊が始まるのを常としているが、萬福寺では天王殿より始まっており建築的特徴の一つである。



十五、萬福寺 齋堂

一棟

所在地

五ヶ庄三番割

萬福寺

規模

桁行五間、梁間六間、一重、入母屋造、本瓦葺

時代

江戸時代（寛文八年）

指定

大正二年四月十四日

齋堂は僧侶が食事をする処で、正面十九・四メートル、側面十七・五メートルの単層入母屋造の建物で、軒は一重疎檼で方柱を用い柱の下に石造礎盤を附している。正面一間通りは吹放しとし、身舎正面の中央の一間は扉障子、両脇小間^{こま}は扉障子、半扉付で他は腰板壁とし上部に明障子窓を入れている。後面は正面と同様で、内部は四半瓦敷の床で天井は鏡天井とし、柱間に虹梁を架け斗拱^{たこう}は挿肘木^{さしひじき}で卷斗^{まきう}で天井廻縁を支え、斗拱間に板斗拱^{いたたこう}を入れている。入側は化粧屋根裏天井で繫虹梁を架構し、妻飾りは二重虹梁・大瓶束・三ツ斗組としている。



六、萬福寺 禪堂

一棟

所在地

五ヶ庄三番割

萬福寺

規模
形式

桁行五間、梁間六間、一重、入母屋造、本瓦葺

時代

江戸時代（寛文三年）

指定

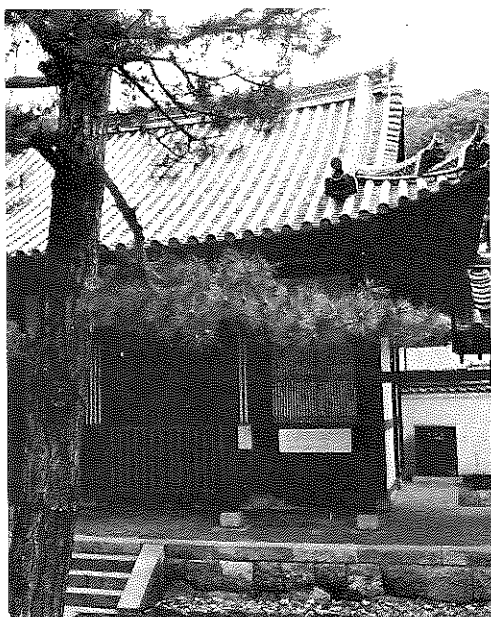
大正二年四月十四日

禪堂は僧侶が坐禅を行う建物で、大雄宝殿の前に齋堂と向い合って建っており、外観は齋堂とほぼ同じ建物であり伽藍のなかでも特に重要なものである。

一重疎檼の軒で方柱・化粧貫を用い、柱の下には石造の礎盤を附設している。正面一間通りは齋堂と同様吹放しとしている。

内部は四半敷の床、天井中央部は鏡天井とし両面及び背面は化粧屋根裏天井となっている。堂内後方に来迎壁を設置し、白衣観音坐像を本尊、善財童子と八歳竜女を脇待として安置している。

なお、来迎壁の上部に西域木の銘が刻まれている。



祖 師 堂



伽 藍 堂

七、萬福寺伽藍堂

一 棟

祖師堂

一 棟

所在地 五ヶ庄三番割 萬福寺

規模 桁行三間、梁間三間、一重、入母屋造、本瓦葺

時代 江戸時代（寛文九年）

指定 大正二年四月十四日

この二つの建物は規模・構造形式ともほとんど同じで、
相対して建っている。

一重疎極の軒で方柱を用い、下部に石造礎盤を付けている。母屋正面の中央は扉障子を用い、両脇小間に連子窓、両端は引違明障子ひきかひあやうじと下部は腰板壁である。内部は鏡天井四半瓦敷で、伽藍堂には関帝像を祖師堂には達磨大だるま師を安置している。

この二棟は、扉と左右の連子窓の組み合わせによって、
小堂ながら趣のある建物である。



鼓 楼



鐘 楼

六、萬福寺鐘楼

鼓楼

一棟

一棟

所在地

五ヶ庄三番割 萬福寺

規模形式

桁行一間、梁間一間、一重もこし付
入母屋造、本瓦葺

時代

江戸時代（鐘楼寛文八年、鼓楼延宝
七年）

指定

大正二年四月十四日

規模・構造形式ともほとんど同一の建物で、上層は二軒扇檼の軒で禪宗様の詰組・支輪を附し、唐様の勾欄がめぐっている。下層は一重疎檼を用い、柱は方柱で石造礎盤は前面の柱のみに用い他は地長押とめてある。

内部は化粧屋根裏天井で、床は拭板張りとし後方に階段を設けている。

このような形式の鐘楼・鼓楼は、日本の寺院では少ないものである。又、簡素な構えの下層と組み物・扇檼を用いた軒の深い上層とのコントラストが特徴的である。



丸、萬福寺 三門 一棟

所在地 五ヶ庄三番割 萬福寺

規模 三間三戸二階二重門、入母屋造、本瓦葺、両山廊付、各切妻造

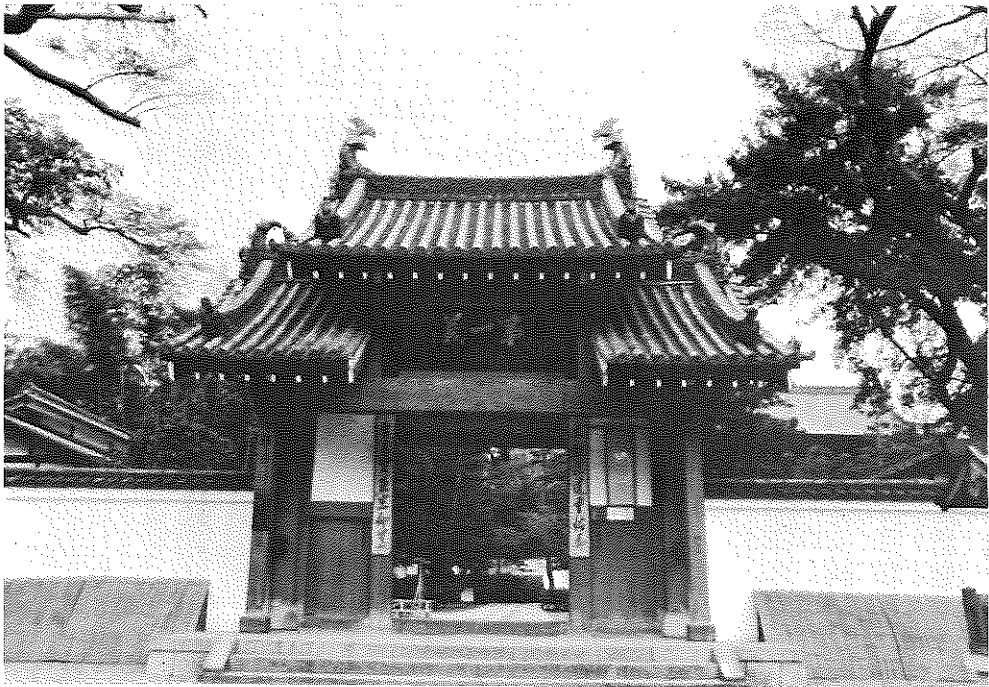
時代 江戸時代（延宝六年）

指定 大正二年四月十四日

柱間三つ戸口三つの二重の丹塗の門で、左右に切妻造の山廊を附けている。大棟中央に宝珠、両端に鯨くじらを置き上層の軒は二重扇椽で三手先詰組みつぎぐみで飾り、下層は二夕軒繫椽の軒で二手先詰組を飾りとし、天井は鏡天井である。柱は円柱で、下部に石造礎盤を附している。

宝珠銘

「元禄十四年辛巳吉日穀旦大樹君賜金重修」



三、萬福寺 総門 一棟

所在地 五ヶ庄三番割 萬福寺

規模 桁行三間、梁間二間、一重、切妻造
形式 段違、本瓦葺

時代 江戸時代（元禄六年）

指定 大正二年四月十四日

総門は萬福寺を訪れたときに最初に出合う建物で、中央部を高くし左右を一段低くした丹塗の門である。

軒は一重疎檼で方柱を用い、下に石造礎盤を附している。中央部に扉を設け両側は腰板壁で、背面中央壁に円を漆喰で作り出している。

前後の外柱間に太い桁を架けてその上に束を建てて、段違いの屋根構造を形成し、大棟の両端にはマカラという瓦製の架空の動物を置いている。

大棟鬼瓦銘

「癸酉元禄六年六月吉日宇治住山田源左衛門尉正勝」

三十一、萬福寺

東方丈

一棟

西方丈

一棟

所在地

五ヶ庄三番割

萬福寺

規模形式

東方丈 桁行二〇・九メートル、

梁間一四・九メートル

一重入母屋造、こけら葺、

西方丈 桁行一七・八メートル、

梁間一一・九メートル、

一重、切妻造、こけら葺

東面、西面、北面庇付

時代

江戸時代（東方丈 寛文三年）

（西方丈 寛文元年）

指定

大正二年四月十四日

法堂の左右にある建物で、向かって左が西方丈、右が東方丈である。萬福寺の建物は、ほとんどが大陸風の土間式であるが、両方丈のみは畳敷の和風建築である。

建物の形式はほぼ同じで、軒は一重疎檼で鼻隠板を打ち、方柱を使用し内法長押をつけない。東方丈は、正背



東方丈

面に広縁、両側面に樽縁くわんえんを、西方丈は正面に広縁、背面・東面に樽縁をめぐらせ、柱間には障子・雨戸を建て、天井は棹縁天井である。

両方丈とも内部は八室に区分され、間仕切には襖を用い、中央間には一般禅宗方丈のようには仏壇を設けない。なお、東方丈は明和頃に改造され、床の間内法長押がつ

けられた姿に、西方丈は創建当初の姿に復元されている。

所在地
形式模

五ヶ庄三番割
四脚門、切妻造、本瓦葺

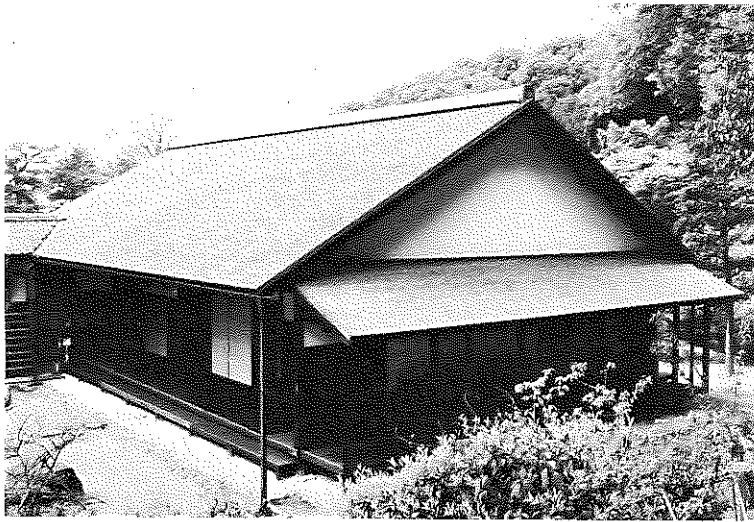
三三、萬福寺

通玄門

一棟



通玄門



西方丈

開山堂の正面に建っている丹塗の四脚門で、本柱は円柱・控柱に方柱を用い、本柱を棟まで延ばして棟木を支え、貫で各柱を繋いでいる。軒は疎檼で鼻隠板を付けて中央部には格子戸を建て込んでいる。

時代
指定

江戸時代(寛文五年)
昭和四十年五月二十九日

三三、萬福寺 開山堂 一棟

所在地 五ヶ庄三番割 萬福寺

規模 桁行三間、梁間一間、一重裳階付、
式 入母屋造、背面後室附属、向唐破風
造、本瓦葺

時代 江戸時代（延宝三年）

指定 昭和四十年五月二十九日

開山堂はその名のとおり、開創者の隠元禪師を祀るお堂で、前面に卍の勾欄を附設している。

大棟中央に宝珠を、両端に鰭を置き、上層は二夕軒半繁極の軒で方柱を用い、組物は三ツ斗組を用いている。屋根は二重であるが、構造的には一重で梁間一間の裳階を附けた形である。

正面一間通りを吹放しとし、天井は本堂・法堂と同じく蛇腹天井とする。内部は裳階部分が化粧屋根裏天井、身舎は鏡天井で後室は格天井とし、床は後室が拭板張り、で他は四半瓦敷とし、後室正面には棧唐戸と半扉を建て



込んでいます。



二十四、萬福寺 壽藏 一棟

所在地 五ヶ庄三番割 萬福寺

規模 六角円堂、一重、本瓦葺

附、中門（棟門、こけら葺）

時代 江戸時代（寛文三年）

指定 昭和四十年五月二十九日

壽藏は隠元禪師の墓所で寿塔ともいい、生前に作られたものである。小さな建物ではあるが、円柱を用い軒は扇椽で、正面の三間に円窓を設けている。

内部は板張りの床で、隠元禪師の像を祀り、床下に棺を収めている。なお、屋根の鬼瓦には中国の賢人達が浮彫されている。



二十五、萬福寺 舍利殿

所在地 五ヶ庄三番割 萬福寺

規模 桁行三間、梁間三間、一重、宝形造、

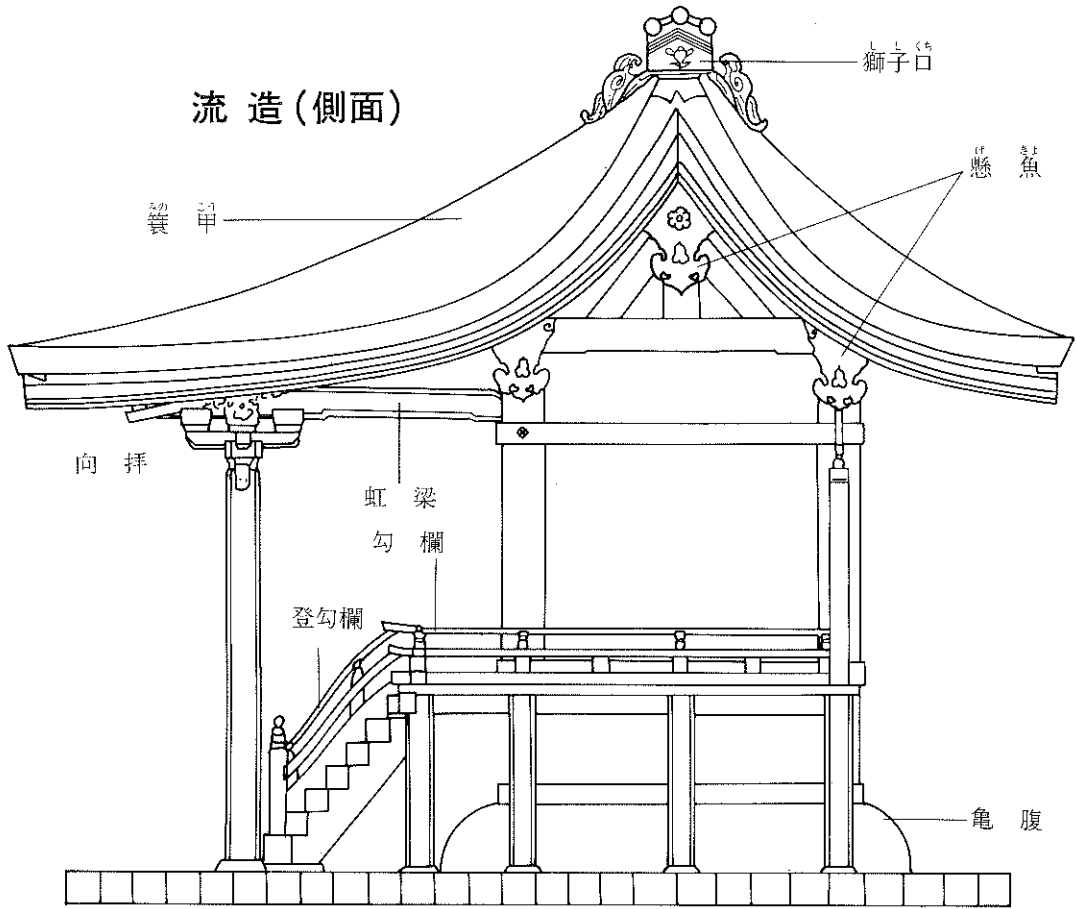
本瓦葺

時代 江戸時代（寛文六年）

指定 昭和四十年五月二十九日

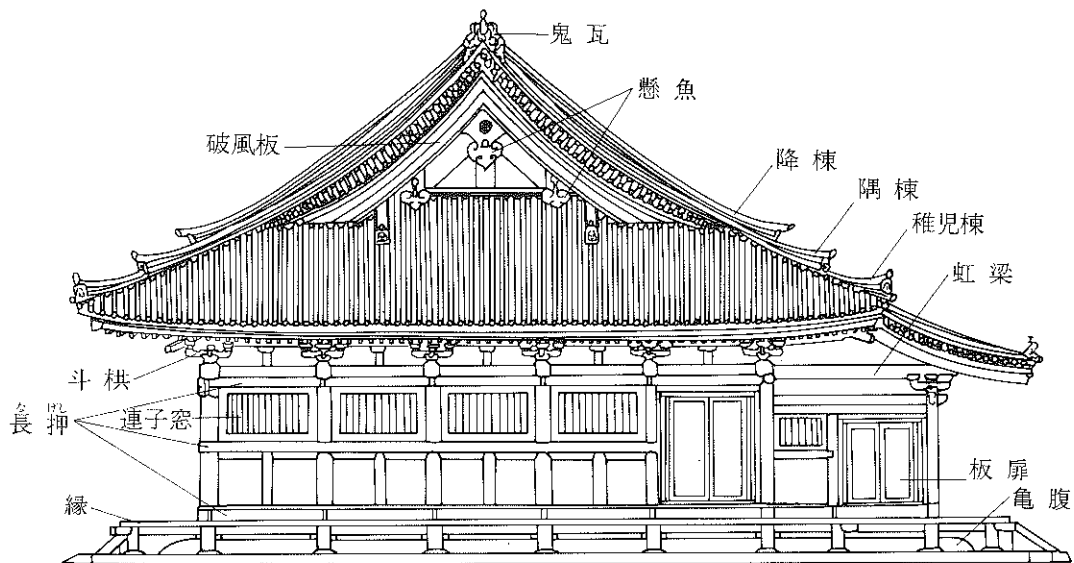
開山堂の後方に建っている仏舍利を納める建物で、棟に宝珠・露盤ろばんを置き軒は二重扇檼、唐様三ツ斗組詰組斗栱を用いている。

内部は、格天井・拭板張りの床で周囲に縁をめぐらせている。正面三間は扉障子とし、中央間には半扉を附け、側面中央は円窓、前側一間は扉障子、後側一間及び背面は漆喰壁としている。



宇治上神社境内社
春日社社殿

和様仏堂(側面)



用語解説

かいろう (廻廊)

建物のまわりにつけた、長く折れ曲った廊下。

かえるまた (臺股)

かえるが股を広げたような形の構造的・装飾的建築材。

かがみてんじょう (鏡天井)

板を並べて張った平たい天井。

かしらぬき (頭貫)

柱と柱をつなぐ薄い材木を貫といい、柱のいちばん上のものを頭貫という。

からよう (唐様)

鎌倉時代に禅宗とともに伝わった建築様式で、禅宗様ともいう。

がらん (伽藍)

寺院の建物全体を指す総称。

きつれごうし (木連格子)

屋根の破風の後に用いる格子の妻飾り。

きわり (木割)

建物の各部に使う木材の大きさや配置の方法などの割合を割付けること。

げぎよ (懸魚)

屋根の切妻部分の頂点やその下にある装飾的彫刻。

げじん (外陣)

社寺の本殿や本堂のなかで、中心部分へ内陣の側の部分で、一般の人が入れる所。

けししょうやねうらてんじょう (化粧屋根裏天井)

かたむきのある屋根裏のように見える天井で、化粧とは美しく仕上げるということである。

けたゆき (桁行)

建物小屋梁に直角の方をいう。

こうはい (向拝)

仏堂や社殿の前又は、後にある身舎から突き出している屋根と階段のある部分。

こうらん (勾欄)

廊下や階段に転落しないように又、飾りとしてつける手すり。

こうりょう (虹梁)

柱と柱の間に架け渡した梁で、その形が虹のように反っているとところから虹梁と呼ぶ。

さんからど (棧唐戸)

木わくの中に板を入れて、それを細い木で留めている扉。

さんろう(山廊)

三門の上層へ昇るための階段をおおっている建物。

しきやくもん(四脚門)

二本の太い柱の前後に、二本づつ計四本の支え柱の付いている門。

しつくいかべ(漆喰壁)

石灰とすさにのりを混ぜたもので塗った壁。

しはんじき(四半敷)

床に敷く石や瓦の敷方の一つで、一辺に対して45度に傾けた敷方。

しゆじ(種子)

密教などで如来・菩薩などを表わす特定の梵字。

すがるはふ(縄破風)

身舎から一方に伸び出した形の破風。

そばん(礎盤)

禅宗様(唐様)建築で礎石の上に重ねて柱を受けるもので、その形は上が凹面下が凸面である。

たばさみ(手挟)

向拝の内側で柱にそって付けられている三角形の彫刻を施した板。

たるき(檜)

屋根の裏板を支えるために、棟から軒にわたす材木。

つか(束)

短かい柱のこと。

つめぐみ(詰組)

柱と柱の間に斗拱をたくさん並べて組むことで、禅宗様の特色の一つである。

ときよう(斗拱)

柱の上にあって軒などを支えるもので、斗とは四角のますのような形であり、拱は肘木のことです。斗や桁などを載せる舟形の角材のこと。

ないじん(内陣)

仏堂や社殿で、神体や本尊を安置するところ。

ながれづくり(流造)

神社本殿の一形式で、切妻屋根の前の屋根が長く伸びた形。

なげし(長押)

柱と柱をつなぐ材木で、貫とちがい柱の側面に取り付けるものであり、取り付ける位置によって内法長押・腰長押・地長押と呼んでいる。

はいでん(拝殿)

神社の本殿の前にある礼拝を行う建物のこと。

はなかくしいた(鼻隠板)

檜の先端を隠すために取りつけた板。

はふ(破風)

屋根の切妻に取りつける合掌形の板のことであるが、その部分全体を示す意味もある。

はりま(梁間)

梁の架かっている方向のことをいう。

ひじき(肘木)

斗と組み合わせて上からの重みを支える横木のこと。

ひらみつど(平三ツ斗)

横一文字の肘木の上に斗を三個のせたもの。

ひわだぶき(檜皮葺)

檜の皮を75センチ程度の長さにとろえ、竹釘でとめて屋根を葺くこと。

ふたのき(ニタ軒)

檜が上下二段になっている軒のことで、下(奥)を地種・上(前)を飛檐檜という。

ほうぎょうづくり(宝形造)

屋根の形の一つで、ピラミッドのような形の屋根。

まきと(巻斗)

斗の一種で肘木を一方にのみ受けるもので、斗栱の基本的な形である。

みてさき(三手先)

斗栱の組み方の一つで、壁面から前に肘木が三回出

てその一番上の肘木の斗で桁を受ける方法。

めんとり(面取り)

装飾や破損を防ぐために、柱のかどを削ること。

もこし(裳階)

身舎を囲んで巡る細長い庇や廊下のような部分のこと。

もや(身舎)

仏堂や社殿などの建物の中心となる部分。

よせむねづくり(寄棟造)

屋根の形の一つで、屋根の面が四方にできる形で四注式ともいう。

れんじまど(連子窓)

断面四角又は菱形の木を縦又は横に並べた窓。

わよう(和様)

平安時代後期に完成された建築の様式。

国指定建造物一覽

(区分)	(名称)	(時代)	(員数)	(所有者)
重文	十八神社本殿	室町(長享元年)	一棟	十八神社
重文	許波多神社本殿	室町(永祿五年)	一棟	許波多神社
重文	萬福寺大雄宝殿	江戸(寛文八年)	一棟	萬福寺
重文	萬福寺法堂	江戸(寛文二年)	一棟	萬福寺
重文	萬福寺天王殿	江戸(寛文八年)	一棟	萬福寺
重文	萬福寺齋堂	江戸(寛文八年)	一棟	萬福寺
重文	萬福寺禪堂	江戸(寛文三年)	一棟	萬福寺
重文	萬福寺伽藍堂	江戸(寛文九年)	一棟	萬福寺
重文	萬福寺祖師堂	江戸(寛文九年)	一棟	萬福寺
重文	萬福寺鐘樓	江戸(寛文八年)	一棟	萬福寺
重文	萬福寺鼓楼	江戸(寛文八年)	一棟	萬福寺
重文	萬福寺三門	江戸(延宝六年)	一棟	萬福寺
重文	萬福寺総門	江戸(元禄六年)	一棟	萬福寺
重文	萬福寺東方丈	江戸(寛文三年)	一棟	萬福寺
重文	萬福寺西方丈	江戸(寛文元年)	一棟	萬福寺
重文	萬福寺開山堂	江戸(延宝三年)	一棟	萬福寺

重文	萬福寺通玄門	江戸(寛文五年)	一棟	萬福寺
重文	萬福寺寿藏	江戸(寛文三年)	一棟	萬福寺
重文	萬福寺舍利殿	江戸(寛文六年)	一棟	萬福寺
重文	浮島十三重塔	鎌倉(弘安九年)	一基	放生院
国宝	平等院鳳凰堂	平安(天喜元年)	四棟	平等院
重文	平等院觀音堂	鎌倉(前期)	一棟	平等院
重文	浄土院養林庵書院	桃山	一棟	浄土院
重文	宇治神社本殿	鎌倉	一棟	宇治神社
国宝	宇治上神社本殿	平安(後期)	一棟	宇治上神社
国宝	宇治上神社拜殿	平安(前期)	一棟	宇治上神社
重文	宇治上神社 境内社春日社社殿	鎌倉	一棟	宇治上神社
重文	白山神社拜殿	鎌倉(建治三年)	一棟	白山神社

宇治の建造物

昭和61年3月20日 印刷

昭和61年3月30日 発行

編集 宇治市教育委員会
発行 京都府宇治市宇治琵琶45
TEL (0774) 22-3141(代)

印刷 (有)新進堂印刷
宇治市宇治妙楽9
TEL (0774) 22-3024(代)

